年頭挨拶

2026年を迎えて

早稲田大学
基幹理工学部情報通信学科 教授
一般財団法人日本ITU協会
出版・編集委員会 委員長

亀山（かめやま）　渉（わたる）

新年、明けましておめでとうございます。

出版・編集委員会を代表し、会員の皆様に謹んで新年のお喜びを申し上げます。編集委員会一同、本年も、『ITUジャーナル』と『ニューブリーズ』の充実に邁進してまいります。

皆様はEmacsで動く「Doctor」というプログラムをご存知でしょうか。Doctorは、Emacs上でELIZAプログラムの動作を再現する実装で、ELisp（Emacs Lisp）で書かれています。また、ELIZAは、MITのジョセフ・ワイゼンバウム氏が1960年代半ばに書いた非常に初期の自然言語処理プログラムで、ユーザが入力する文章に対して応答を生成し、テキストによるユーザとの対話を実現します。ELIZAは、若干の知識ベースと単純なパターンマッチング手法のみを使用していましたが、驚くような人間くさい応答を返し、当時、ELIZAの応答をそのまま受け止めるユーザも一部には存在したとのことです。今日で言うところの「チャットボット」の元祖と言えるでしょう。一方、Doctorはセラピストのような応答を返すプログラムとしてEmacsに実装され、1986年の（GNU）Emacsバージョン17で導入されました。当時私は大学院生で、噂に聞いていたDoctorを初めて試したところ、単純なプログラムとは思えない自然な応答を返すのに大変驚きました。ただ、やはり単純なプログラムであるため、5分もやり取りをしていると満足な応答が返ってくることはなくなり、飽きてきたのを覚えています。終了する際には、「bye」などと入力するのですが、そうすると「My secretary will send you a bill.」と応答が返り、おしゃれだなと思ったものです。現在のEmacsでも実行できますので、Emacsをお使いになっていてまだ動かしたことがないという方は、是非、「M-x doctor」をお試しください。

さて、ELIZA開発から約60年、あるいは、EmacsのDoctorから40年ほどたち、ChatGPT（Generative Pretrained Transformer）に代表されるLLM（Large Language Model）の近年の進歩には目を見張るものがあります。特に、ここ1−2年の性能進化には驚かされるばかりです。ChatGPTが「新語・流行語大賞」の候補に初めてノミネートされたのは2023年でした。ChatGPTをOpenAIが正式にリリースしたのは2022年11月末でしたので、約1年間で日本にもかなり浸透したということでしょう。一方、2025年の「新語・流行語大賞」では、「チャッピー」という名称でChatGPTが再びノミネートされました。私がこの呼び方を知ったのは2025年の夏ごろでしたが、若い世代の呼称として浸透しているようです。OpenAIは、ChatGPTがどれくらい利用されているのかをあまり開示していませんが、2025年10月に全世界で週間アクティブユーザが8億人を超えたこと、また、日本の利用の3/4が25歳未満であることが報道されました。「チャッピー」がノミネートされた理由がよく分かります。

一方、LLMの負の側面も2025年には大きくクローズアップされました。ハルシネーション、情報源の不明確さ、機密及び個人情報漏えいの懸念、過度の依存による判断力の低下、各種バイアスの存在等、枚挙に暇がありません。また、LLMによって不幸な事故に追い込まれたとして訴訟に発展したケースも存在します。要は道具の使いようだと思いますが、それでも、若年層への影響や過度の依存等は決して無視できません。これに対し、AIガイドラインや規制がITUをはじめとする国際機関、国及び企業レベルで議論されているのは皆様ご存知のとおりです。使わないという選択肢に戻るのはもはやありえないと思われ、我々人類に課せられた新しい課題の一つであるのは間違いなさそうです。ELIZAにも見られた現象が再び起こっており、「歴史は繰り返す」を再認識しています。皆様はどうお考えでしょうか。

末筆ではありますが、会員の皆様のご多幸とご健勝、そして本年が皆様にとって更なる飛躍の年となりますことを祈念いたします。本年も『ITUジャーナル』をどうぞよろしくお願いいたします。